



真宗大谷派 東岳山
安泉寺

〒496-0945
愛知県愛西市三和町中ノ割173-1
TEL: 0567(28)0001
Mail: dai5norog@gmail.com

登録してね



2026年

3
月号

NO.180

泉

-IZUMI-

- ―目次―
- 表紙「おひなさま」
 - 百折不撓「グリーン・ケア」
 - 震災表百
 - いのちのメッセージ
 - サロンいずみ開催
 - ビニールハウスは極楽
 - それでも人生には意味がある
 - 掲示板・お知らせコーナー
- 野呂大悟
野呂美道
野呂美道
野呂美道
野呂美道
野呂美道
勝田茅生



安泉寺ホームページがリニューアルしました

雛の間と なりて華やぐ 奥座敷

博子



先日、仕事の合間を縫い、別院で開催された「グリーンケア」の勉強会に足を運びました。住職として、また一人の間として、非常に学びの多い時間でした。

私は、「グリーン（悲嘆）」と聞くと「死別による悲しみ」だけを指すものと考えていました。しかし、本来のグリーンとはもっと広く、深いものです。それは大切な「人」との別れだけでなく、築いてきた「関係性」、使い慣れた「物」、あるいは自身の「健康」や住み慣れた「環境」など、自分の一部を構成していた大切な何かを喪失したときに湧き上がる、心と体の自然な反応を指します。

その反応は、決して「悲しみ」という一色ではありません。やるせない怒り、自分を責める後悔、あるいは何も感じられないほどの虚脱感……。それら渾然一体となった感情の揺らぎこそが、私たちがその対象をいかに大切に思っていたかという「愛惜」の証でもあります。

講義を聞きながら、私は住職として、現代社会が抱えるある「矛盾」について深く考えさせられました。今の日本は、かつてない多死社会を迎えようとしています。それにもかかわらず、死は徹底的に日常から遠ざけられ、一種の「タブー」のように扱われています。まるで、急に飛んできたボールが体に当たってから、初めて自分が試合の最中であつたことに気づくような、準備のない「死」が溢れているように感じます。

かつての共同体（ムラ）が解体され、人間関係が希薄になつた現代では、死は「非日常」の出来事となつてしまいました。しかし、形を過去に戻すことはできません。だからこそ、今という時代に即した形で、喪失の痛みに寄り添い続ける「グリーンサポーター」の視点が不可欠なのでしょう。

浄土真宗の教えにおいて、お寺は単に葬儀を行う場所ではありません。それは「仏法（真実の教え）に出遭う場」です。親鸞聖人は、悩みや苦しみの絶えないこの世界を「火宅無常（かたくむじょう）の世界」と教えられました。思い通りにならない人生の現実を直面し、立ちすくむとき、私たち

は初めて「何のために生きるのか」という根源的な問いに向き合います。

死という圧倒的な悲しみを、単なる「終わり」としてやり過ごすのではなく、それを縁として「今、生かされている命の尊さ」や「生きる喜び」へと転化させていく。そんな場を継承していくこそが、寺院の使命であると痛感しています。

お寺という空間は、派手な飾りはなくとも、静かに自己を見つめるのに最も適した場所です。たとえ孤独を感じていても、そこには目に見えない多くの先達や、同じ苦悩を抱える「共同体（サンガ）」との繋がりがあります。葬儀という儀式において最も大切なのは、形式の豪華さではなく、故人の歩まれた人生に敬意を表し、その教えを自らの心に宿していく「静かな時間」です。

こうした願いから、私は「生（いのち）」を照らそうプロジェクト」として、お一人おひとりの物語に合わせた葬儀のあり方を推奨しています。これまでお寺にご縁がなかった方も、どうぞご安心ください。お寺は、新しい縁が生まれる「開かれた場」です。

悲しみは消し去るものではなく、共に抱えて生きていくものです。

「悲しみは、悲しみを知る悲しみに救われ、涙は、涙にそそがれる涙に助けられる。」（金子大栄）

TERASOUプロジェクトは、少しずつ歩みを進めてまいります。まずは、詳細を知りたい方はお寺までご連絡ください。



TERASOUプロジェクト
-“生（いのち）”を照らそう-



◆東海地方の私たちにとって、実はとても危機的状況なのに、それが実感できない日々が続いています。毎日どこかで地震の情報や災害のニュースが報道されていますが、いまだ東海地方においては、際立った災害が起こっていません。

◆私たちはそのことに慣れきってしまったって、いつこうに災害のための準備をしようとはしていません。「起こって見なければ分からない。そんな気にならない。」などという呑気な気分が私たちの地方に充満しています。

◆しかし、いずれ地震をはじめとする災害は必ず起こります。それがいつかは分かりません。能登地震のように、まさか正月に、というように、全く自分たちにとって一番都合が悪い時にそれは起きる可能性がとても大きいのです。

◆名古屋大学の福和先生が言っていました。「皆さん、今一つ本気度が足りないのではないですか。分かっちゃいるけどまだ大丈夫、なんて思っていますか?」私も含めてその通りだと思います。

◆私の今年のやること。まず、家具の固定を完璧にやる。そして、最低限の家の補強をやる。待ったなしの状況を自ら作り出します。それとともに、地域の災害が起きた時の避難計画をじっくりと作り出すことを約束します。

◆ハザード会の活躍で、防災に関する請願事項が議会を通り、行政と力を合わせながら、地域防災計画を作る会議が立ち上がり、すでに5回を数えました。今の状況は、地域の災害時の問題点を探り出し、それを是正するための防災計画を模索する作業

を進めていることです。

◆地域の住民の方々にアンケートを取ったり、ワークショップを通して、防災意識を高めたりと、少しずつ活動を進めています。要はどの家庭でも命を守るために、自助の立場で実際に活動をしてほしいのです。

◆防災をいつも心に思いを浮かべながら、「今ここで地震が起こったらどうするか、水害にあったらどうするか。」を想定することです。いかに想像力を働かせるかが、命を救う決め手になると思います。意識の衰退を食い止めつつ、増大する災害のリスクに立ち向かっていきたいと思っています。

安泉寺前住職 野呂美道 敬白



宮城県牡鹿郡女川町指ヶ浜
「女川いのちの石碑」

◆聖路加国際病院の日野原重明さんのドキュメンタリーを紹介する。

◆京大病院出身の彼は初めて16才の少女を診察する。結核性髄膜炎の少女の家は貧しく、母も働いていて見舞いにも来れない。状態が急変し、打つ手もない時に、少女は彼と母親に深い感謝の気持ちを表わし、亡くなっていった。「彼女が死ぬときに、なぜ私は手を握り『安心して天国に行きなさい』と言ってやらなかったのか。」このような後悔を経て、彼は終末医療を始める。

◆広島の小中学校で、「いのちの授業」を行った彼は、いのちを自分のためだけでなく、人のためにも使って欲しいと訴える。それには理由があった。

◆彼はよど号ハイジャック事件の人質として4日間拉致された。解放され、命をいただいたと感じた彼の心境。「いつかどこかで与えられたお恵みを誰かにお返しできれば。」

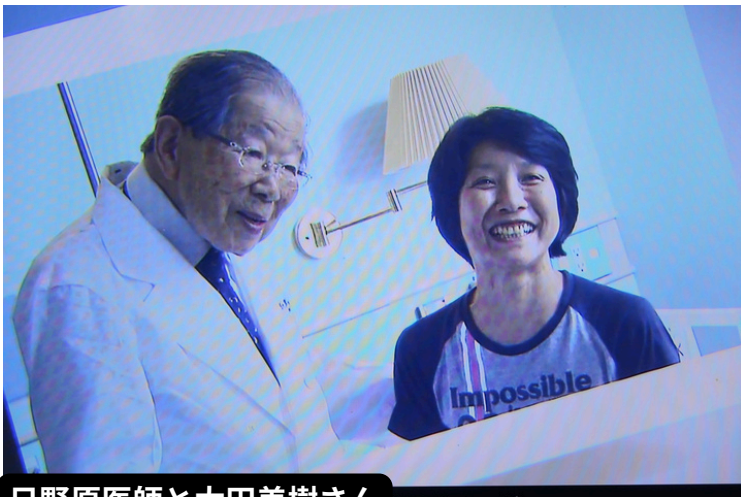
◆ホスピスで最期を過ごす太田美樹さんが大好きな彼の言葉「ふやすなら 微笑みの しわを」◆美樹さんは末期の肺がんで、静かに生活をしていた。日野原医師とのツーショット(写真参照)。この写真を見れば、彼の言葉が深くうなずける。夫がその写真を遺影に選んだとして、彼に感謝の気持ちを伝えるにきた。「私も妻の遺影から、生きていく力を与えられました。」

◆末期の肺がんと闘病している福井さんも彼の診察を受けた。彼は福井さんが内に秘めた生きる力を最大限引き出して、応援した。福井さんには臨月を迎えた娘がいた。初孫を抱けるまでは死ねない。その

気持ちも福井さんを支えた。しかし、写真を見ただけで、抱けないまま福井さんは旅立った。安らかな往生だった。

◆家庭的には、日野原医師は認知症の妻を抱えて、日々を暮らしている。時々妻が重症になって、治療にあたることもある。その彼が100才を迎えた。筋力の衰えはあるものの、立派な現役の医者である。「亡くなる時は感謝の言葉で終わりたいね。」彼の心境である。……

◆日野原重明氏は数年前、亡くなった。しかし、彼のスピリッツは多くの医療者のみならず、私たちにも「いのちのメッセージ」としてちゃんと届いている。今月の言葉にも先ほどの「ふやすなら 微笑みの しわを」を選ばせてもらった。



日野原医師と太田美樹さん

◆【サロンいずみ】ができた経緯

一月のある日、ご近所の散歩仲間二人が「お寺さんで仲間が集まって何かやってみん？最近みんなと会わんし。」と相談にきました。そういえばコロナ前には、地域の女子会（8割は婆）で年に数回食事会したり、それなりの交流があったけど、コロナを機に食事会もなくなり、その間に体力も落ちたり、出不精になったり色々な変化があった人も多いのでしょね。

◆私自身も太極拳・手話・俳句等してはいますが、肝心のご近所さんとの触れ合いが少なくなりました事に気付いていませんでした。二人のおかげで「2月4日（水）午後2時半サロンをやろう！」とその場で話が纏まり、早速地域の熟年と思われる人達にビラを配り、二月四日、『誤嚥を防ぐ口腔体操』『座って出来るストレッチ』を実施しました。その日は社協の職員二人含めて約十五名（男性も三名）程が集まり、日ごろ使わない体のストレッチ、口の体操、指で脳トレを笑いながら楽しみ、締めはお茶とお喋り！となりました。

次回の予定

日時 三月四日（水）午後一時半

場所 安泉寺書院

口腔体操・ストレッチ・お楽しみ脳トレゲームなどが良いでしょう！



楽しそうに談笑するサロン参加者

◆（老僧より）能登教区ボランティア委員会委員長 福田氏のお話を紹介します。

◆「ビニールハウスでの生活は楽しかった。寂しくなかった」。これは「令和6年能登半島地震」直後からおよそ1か月間、畑用のビニールハウスで避難生活をされていたある方の言葉です。震災後、土砂崩れによって道路が通行止めになり、集落は孤立してしまいました。仕方なくビニールハウスを避難所とし、皆で持ち寄った毛布やストーブで暖を取りながら過ごしていたそうです。水道や電気は寸断され、さらには携帯の電波も届かない日々が続きましたが、皆で力を合わせて何とか全員無事に生き延びることができたそうです。◆その方は現在、金沢市内の娘さんの家で過ごされています。温かいお風呂にきれいな寢床など、ビニールハウスの生活に比べれば遥かに快適で恵まれた生活のようですが、「何も楽しくない」とおっしゃっていました。理由を尋ねたところ、たとえ親子であってもお互いに気兼ねしてあまり居心地が良くないのだそうです。さらに、友人が近所にいないのでとても寂しいらしく、「何も無くて不便だったけど、ビニールハウスに戻りたい」おっしゃっていました。その方にとって、慣れ親しんだ集落の友人と共に過ごせる場所、お内仏（仏壇）やお墓や趣味の畑と共にある場所、たとえ不便で格好の悪いビニールハウスであってもそこが「帰するところ」だったということでしょう。◆人間にとって最も苦しくて辛い状況、昔の方

はこれを「地獄」と名付けました。私たちにとって最も苦しく、辛く、不幸せな状態は帰る場所や心の拠り所が無く、誰も理解してくれない、共感してくれない、独りぼっちだ、と感じてしまうことです。◆震災から2年が経過しますが、能登では悩みや孤独を感じている方が増えています。「帰するところ」を失った方で溢れています。元に戻ることは簡単ではありませんが、失った者同士が語り合い、笑い合うことができるよう。せめてお互いに独りぼっちにならぬよう、私は災害支援ボランティア活動をこれからも続けるつもりです。そして、能登の皆さんと共に苦しみを分かち合っていきたいと思っています。分かち合うことができる場所はきっと、苦しくとも「地獄」ではないはずです。（慈光寺さんの寺報より再掲載させていただきました。感謝します。）



福田正充氏

第二章 苦悩を生き抜く 8

◎ 絶望の淵から立ち上がる

◆失意のままウィーンに戻ったフランクルを、再び悪夢が襲いました。妻ティリーが、ドイツ北部のベルゲン・ベルゼン強制収容所で亡くなっていたことを知ったのです。この収容所は四月十五日にイギリス軍によって解放されていたのですが、六月までに、衰弱していた約五万三千人の被収容者のうち、一万四千人が栄養失調や極度の衰弱のために、次々と命を落としました。ティリーもその一人だったのです。◆あと少し開放が早ければ、助かっていたかもしれない。フランクルはどれほど悔しくやるせない思いをしたことでしょう。◆兄のヴァルターも、一九四二年にイタリアへ亡命するところを捕縛され、アウシュヴィッツの支所へ連行されたあと、いつ、どのような状況かは分かりませんが、炭鉱で死亡したという記録が残っていました。これで生き残った家族は、オーストラリアにいる妹のステラだけとなりました。◆失ったのは家族だけではありません。フランクルの多くのユダヤ人の友人や尊敬する先輩なども帰らぬ人となりました。また華麗で美しかった古都ウィーンは、フランクが心から愛した故郷でしたが、激しい空襲によって変わり果てた廃墟となっていました。◆彼はしばらく絶望から立

ち上がることができず、疲れ果てたよううつろな状態だったそうです。また、約二年半の強制収容所生活のトラウマ（心的外傷）にも苦しめられました。◆フランクルの孤独感は深刻で、「あの世に行けば家族と会えるだろうか」と真剣に考えるほどでした。友人たちは、生きる意欲を失っているフランクルが自殺するのではないかと心配し、いろいろと手を差し伸べようとなりました。かつての研修仲間パウエル・ポーラックを訪ねたとき、初めて「何か、自分が生き残ったことの意味があるに違いない」と、彼の前で慟哭したのだそうです。この時期、十代のとき一緒に社会主義活動をしていたブルーノ・ピッターマンと再会したことは幸運でした。ブルーノは、古いタイプライターを見つけてきて、フランクルに原稿の続きを書くことを勧めました。そして彼のために賃貸アパートを見つけ、のちにはウィーン市立総合病院の精神科部長という仕事まで斡旋してくれました。（続く）



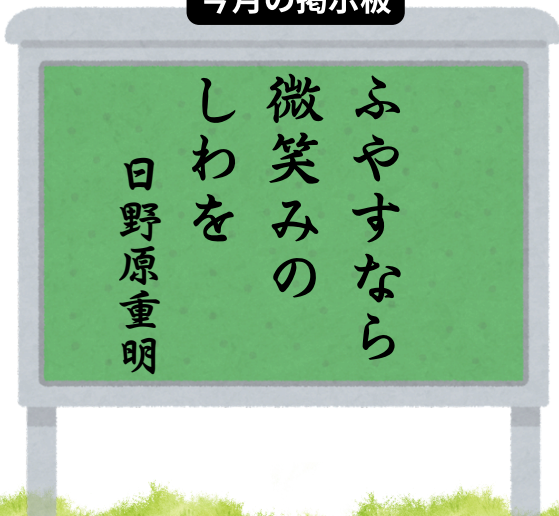


お知らせ
コーナー

3月の予定

- 防災会議・大成講 一日(日)
- サロンいずみ 四日(水)
- 老人クラブ総会 七日(土)
- 追悼法要 十日(火)
- 環境保全会代表者会 十四日(土)
- 文芸クラブ 十九日(木)
- 写真クラブ例会 二十一日(土)

今月の掲示板



訃報

戸屋 久夫さん 三和町 享年九十二才

いずみのほとり (老僧)

◎戸屋さんは安泉寺のすぐ北側のお宅にお住まいでした。老僧の子どものころから、大変お世話になりました。いつも私たちに思いやりのある言葉をかけていただき、感謝しています。家の裏というものは、とかく醜いものが現れがちです。野呂家の良くない側面が何度も目に入ったと思われます。でも、それについてのクレームも一切なく、いつも慈愛に満ちた言葉をいただきました。老僧の三人の子どもが赤ん坊の時にも、夜泣きが多く、やかましかったと思います。月参りの時に「ごめんなさいね。」と謝ると「いやいや、赤ん坊は泣くのが仕事。」と笑って言って下さいました。その忍耐力や包容力に頭が下がりました。

近所の皆さんが、安泉寺の南側に集まり、ご遺体に乗せた車と、ご遺族の車が通過する時、心ばかりのお別れをしました。ご遺族の方たちからは「感激しました。有難うございました。」と感謝の言葉をいただきました。

◎3月ともなると春の訪れが待たれます。先月号に紹介したコウノトリも、ぞくぞくと安泉寺の近くにやってきて、高い電柱に停まっている写真を、見守り隊の方々からいただきました。巣作りをしたいのかなと思います。愛西市民でコウノトリのために何かできないかなと、来る春と共に思う毎日です。

